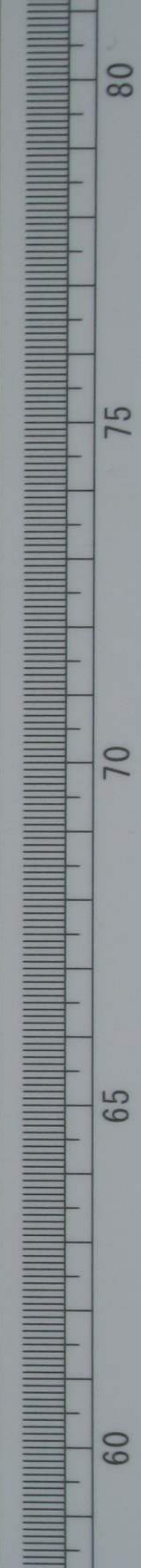


พระเวทย์บุ๋บไต่หะนึ่ง

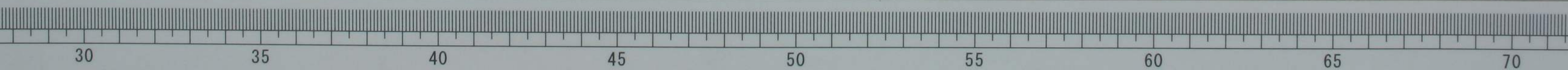
สีพระภาะ ไทะฮี่ไคะ
นคาคะมื่อะ ไคะนคี่ง





พระเวทย์มนต์ห้ามนต์

พิธีพระเวทย์มนต์ห้ามนต์
พระเวทย์มนต์ห้ามนต์

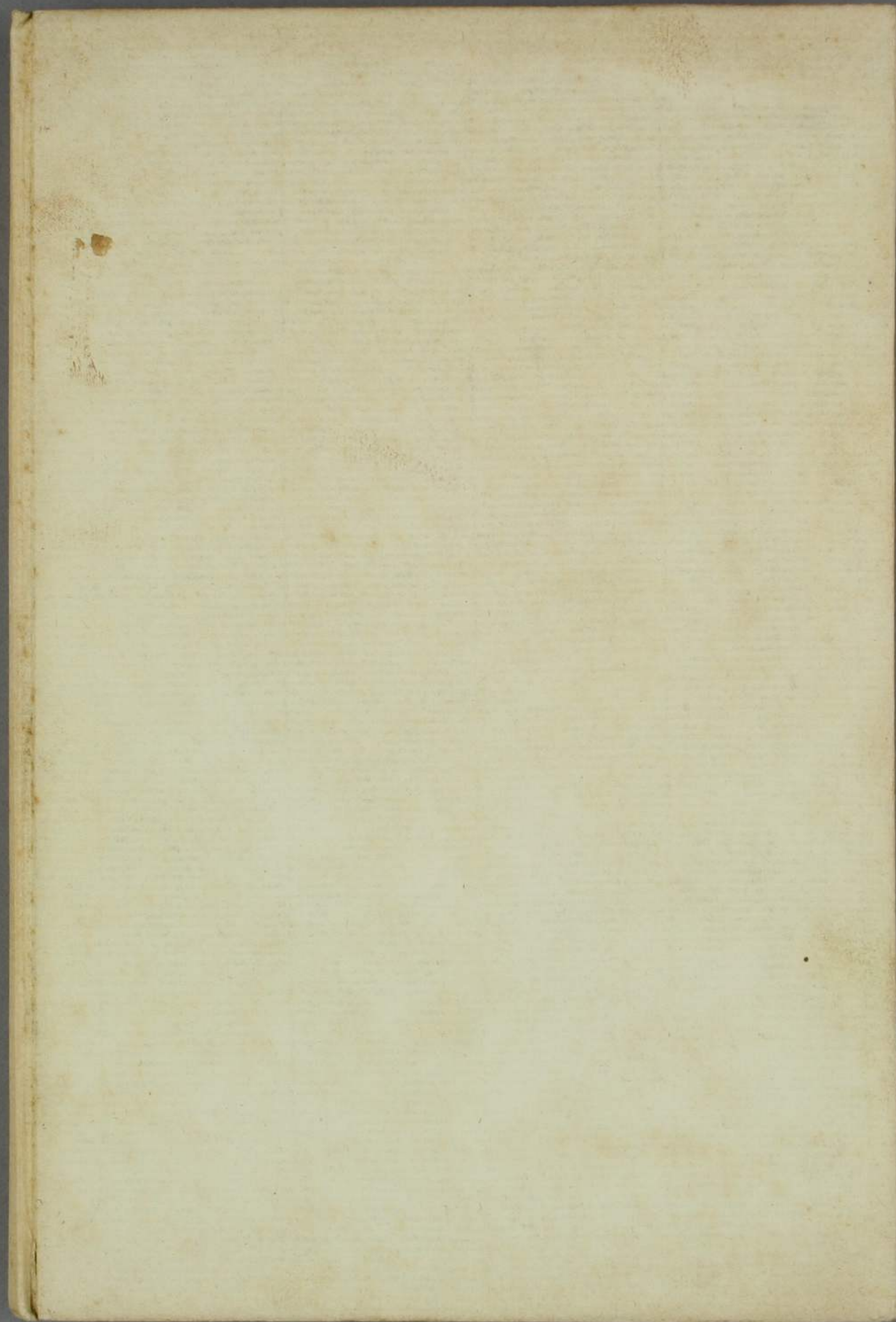


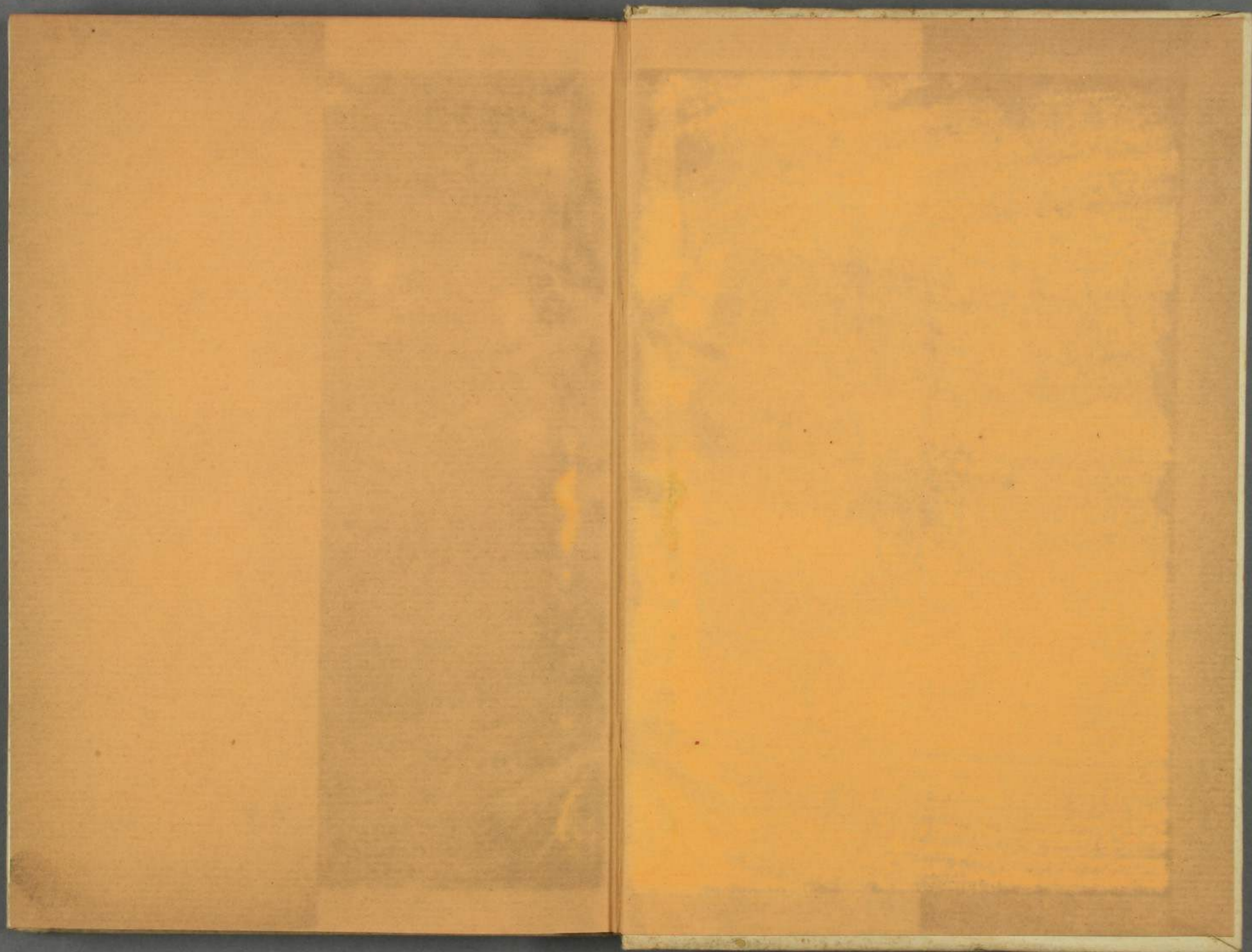


馬鈴薯の花

馬鈴薯の花

久保田 補人 合著
中村 憲吉





久保田柿人
中村憲吉

合著

(アララギ叢書第一編)

歌集
馬鈴薯の花

東京 東雲堂發行





久保田柿人

明治四十二年

森深く鳥鳴さやみてたそがるゝ木の間の水の
ほの明りかも(上高地温泉四首)

久方の朝あけの底に白雲の青嶺（な）の眠り未だこ
もれり

一人ゐるいてゆの日かず山に馴れし思ひのす
るもさびしくありけり

花原の道はきはまる森の中の静けさ思へば鴈
鳴くさこゆ

げんげ田に寝ころぶしつゝ行く雲のとほらの
人を思ひたのしむ(寄居六首)

妻子らを遠くおき來ていとまある心さびしく
花ふみあそぶ

げんげんの花原めぐるいくすぢの水遠くあふ
夕映も見ゆ

夕日さすげんげの色にかへるべき野の家思へ
ばさびしくありけり

ゆふされば母が乳房をふくみ寝ぬる幼な心地
に花にこもれり

物思へば思ひはてなき胸のものをおほにおほ
ろに花にやすらふ

明治四十三年

草枯の野のへにみつる晝すぎの光の下に動く
ものもなし(廣丘村)

冬枯の野に向く窓や夕ぐれの寒さ早かり日は
照しつゝ

冬の木の白き莖立ほのくし夕日ののちの野
にみだれ見ゆ

冬野吹く風をはげしみ戸をとちて夕灯をとも
す妻遠く在り

ところく野のくぼたみにたへたる雪解の
にごり静かなるかも

はるさめの筑摩桑原灰いろに草枯山の遠薄く
あり

草の中の家あちこちと夕ともす灯のひかり雨
に濡れて見ゆ

雨あがる深蒼原にひとしきり暮れの名残の明
るみにけり

いささかの丘にかくろふ天の川のうすほの明
りその丘の草

かゝる國に生れし民ら起き出でて花野の川に
水を汲むかも

いとつよき日ざしに照らふ丹^ニの頬を草の深み
にあひ見つるかな

草の日のいきれの中にむきもこの丈けはかく
るふわが腕のへに

夏草のいよよ深きにつつましき心かなしくき
はまりにけり

さ夜ふかき霧の奥べに照らふもの月の下びに
水かあるらし

霧明りかくおぼろなる土の上にとほく別るる
人やあるらん

この朝け障子ばりする縁先きの石のはだへに
さ霧ふりつゝ

湖のあふれ未だ引きやらぬ稻原の夜のいろ深
し稻光りする

露霜をしげみ寒けみ富士見野の龍膽の花紺な
らんとす

とりいれのをはりの豆を打ちをへて蕨をたた
む日暮の夫篇

この山の紅葉に來つゝ家の人と夜々の炬燵に
したしみにけり

小夜ふかく炬燵にゐつゝ庭つづき原なること
をさびしみにけり

明治四十四年

草枯の國のくぼみにかたまれる沼のいくつに
白あたりにけり
いささかの心動きに冬がれの林の村を去らん
と思ひし(廣丘村)

この朝け霧おぼろなる木の影に日のけはひし
て鳥鳴きにけり

冬川原日にけに潤るゝ水を追ひて菜洗ふ娘ら
の集まりにけり

短か日の川原をいそぐ乏しらの水のあよみよ
寒けかりけり

いささ瀬の水にうつろふ夕映ゆふびやに菜洗ふ手もと
明るみにけり

斯くのごとかなしき胸を森ふかき青蘚あざむすの上に
一人居りつゝ（林の村を去る六首）

この森の奥どにこもる丹にの花のとはにさくら
ん森のおくどに

二年を物思ふとき安らかに我を置きたるかな
し森はも

この蘚に來てあそびたる友二人亡き人となり
しきのふの如し

春ひと日雪とけきゆる青蘚の林のにほひ目を
浮けにけり

この森のをはりの歩みやはらかに蘚に觸りつ
ゝ日は暮るゝかな

眼のまへにその人はありとこしへに消えてゆ
くべきその人はあり

いち日の尊きことをつくづくと心に沁みて手
をとりにけり

たまさかに人のかたちにあらはれて二人睦び
ぬ涙ながるゝ

うつくしく消えてかへらぬ星屑のとはの光を
知りそめにけり

やせ松の松かさたしく小鳥らの嘴寒からんこ
の朝の霜に

つかま野の冬木の松のまばら松小鳥と我と住
み馴れにけり

苗香つるぎの花の静みにほのゆるゝ宵のかをりや星
に沁むらん

うゐきやうの花の畑に宵はやく眠れる星を二
人見にけり

静かなる曇りのおきに火の屋のほのかに赤し
涙ぐまるゝ

貧しき家に生れて遠き國に行くべきものと思
ひ行くかも(遠く行く幼弟に四首)

ちゝはゝは老いていますと思ひつゝ行きゆく
まゝに遠く行くらん

五月雨の青葉の家に安らかにしづかに汝れを
おく時過ぎぬ

生れたる家にいくらも住みあへず薬をもりて
奥蝦夷の家に

眞菰草風通しよき池の家の晴れのいち日よし
さり鳴くも

物もひ晝寝ひるねに入れる夢の人の家をしづかに
よしきり鳴くも

しが肌せだかぜのさはりの遠ざかりうつら／＼に
夢に入るらむ

めざましき若葉の色の日のいろの揺れを静か
にたのしみにけり

眞菰風吹きふく風に今日ひと日しづかにあり
得しことを思ひぬ

おぼつかなき雨のあがり夕方の麥の黄ばみ
はうすほのめけり

おぼしき曇りの中に遠き麥の黄をくきやかに
洩る夕日あり

高原の村に来てすみ家の人とすこししたしみ
茶をのみにけり

若葉するこの村に来てあはれなる話を二つき
かされにけり

ほろび行く湖べの村に一夜寝てとぼく行き
ぬ山のそこひを（富士八湖七首）

静かに一人遊ばんと来りつる山のみづらみ暮
れ入りにけり

かく澄める山のみづに来てたまさかにひと日
を遊びかへり行くかな

湖づたひ若木しみの葉をひたしふりふる雨
のやむ日を知らず

燒石原雨にさび立つみだり木の木ぶかく寒く
我をおくかな

降りにふる日ねもすの雨に山の裾ひろら青野
も今萎るべし

古繪圖の埃はらひて靜かなる湖を驛を其所に
見ること(女坂峠より)

ゐろり火の次の室くらく宵ふけて物さびしら
にいや火を焚きたきぬ(裾野の家六首)

夜をおそく茶をのみをへて何となく足らはぬ
思ひ火を焚きたきぬ

しづかなる事ども思ひ火を焚きて起きてある
ことたぬしかるかも

更けの火のうつら／＼に遠人を思ふともなし
ぬくとくなりて

あが心は静かなるかもゐろり火の揺れのうす
れの壁に揺る影

ゐろり火のもえのさかりをもだしつゝ何はも
我は思ひ居るらむ

草の中の赤錆び水にふきてある夕日の舟は死
にてあるかも

さや／＼し蕎麥の花畑風のむた動くを見れば
我もゆるゝがに

明治四十五年
大正元年

たま／＼に汽車とどまれば冬さびの山の驛うきまに
人の音すも(山の驛入首)

この朝の汽車はすぎけれ家並なみの日あたりおそ
く静かなるかも

山の驛霧のしづくのそぼくをみなのもとも
ら濡れて來にけり

物を煮る店のゐろりに曉がたの面わやさしく
さ霧流らふ

肉を賣る家のうしろに野の木立夕焼さむく枝
をひろげぬ

うすれゆく夕日の驛に客を呼ぶをんなの聲は
うれし聲かも

霜晴れの夜空のうまや路いづべにかだみ聲あ
そく唄ひのこれり

栗焼きし火鉢の色も火の色もつめたく遠くす
ぎ去りにけり

朝照る日のうすら霜ひえくくと夢の丹莖にと
けて沁むかな

馬ぐそに深くかぶさる朝の霜この澤の道に我
れ動くかな

あさの霜とけて流らふ庭石の日の冷めたさを
踏みて入りつる

枯菰に水は動かず底淺の泥明かくと日あた
りにけり

あるものは萩菊日和木瓜ミカの果を二人つみつゝ
相戀ひにけり(あるものは四首)

あるものは髪をなほすと嫁ぎゆきて春の蠶上
げぬ別れ來にけり

あるものは草薙小屋の草月夜ねぶりて妻をぬ
すまれにけり

あるものは金ある家にとつき得て罫がひ篋れ
ぬ病みてかへらず

うら若ききよら心に鞭あつることはたやすし
あはれなるかな(女をあはれむ三首)

天地の千とせの後にさしやけきうつくし心を
誰か知るらん

たま／＼に物かげに行きて涙ふくうら若かひ
なむごきことすも

霜らしく白けし草にちやうちんの光揺れ／＼
野をのぼるかな

日の没りの名残りの明りうすくとわがかへ
る野の家見ゆるかな

野の家に火をあかくと一人して心安らにね
むり得るかな

○

家をそとに三年馴れつゝ宵さむき火桶のうへ
に手をよせにけり(玉川村)

火に倚りてまなこつぶりぬ遠々に野に来て住
みし身を思ひつゝ

いち日のをはりしづかに見えきたる幼なおも
わをうすら火のへに

死火山の裾野の冬のなほ長き日數思ひつゝ、灯
をともしずかも

西窓のうすら明りに藁をうつ隣のおとのはや
聞え居り

枯芝の土手の日あたり折々に土のかわきのこ
ぼるゝけはひ

曉の温泉の霧低く沈みつゝ、氷の湖うみに流れ行く
かな

機唄もなき土地なれや氷の湖霧さむくゝに影
動きつゝ

おぼほしく眉に來觸るゝ霧しづく食しきをもとめ
て朝を行くかな

岸の家日の没りはやくともす灯の氷の湖にう
すくいくつも

冬枯原吹きあるゝ風の西窓に日ねもす鳴りぬ
目を明か〜と

灰いろの草がれ道を毛物にてあるが如くに思
ひて動く(丘より町に歸る途上四首)

板の上に煙草のほくその吹かるゝに似たりお
のれは野をいそぐなり

白ざれの粟稗あは畠はたに立ちとまり何思ひしか今忘
れたり

ひよろ長き草の枯れがらにいや深に疲れ心の
觸はり行くかな

森深く丹の花咲きき吹く風もそこに寂しく冷
めたくありき(想ひ出五首)

丹の花は揺れて静みき森の風の流らふ蘇はた
だ青かりき

うつら／＼丹の花のへに眼をあきて見てある
まゝに夢かと思ひき

日の暮るゝ蘇の青みに身ひとりの頬を觸りつ
ゝ涙流れき

里芋のちひさ畠を森に入りしおのが姿の今見
ゆるかな

一つの赤ぬり馬車に春の雪の重くうつくしく
走りて行くよ

野の朝の土のしめりに春らしき光を踏みぬ町
にむかひて

草枯の土ひそやかに愛らしき春龍膽は眼をあ
きにけり

枯草のそよぎのかけに暮れてゆく春りんだう
は幽かなるかも

障子しめて廊下に出てぬかくの如わけなきも
のに別れてしまひぬ(別れて後に六首)

廊下の板に足うらのさはるとき我らは長く別
れてありぬ

夏蜜柑ひとつ貰ひて持ちてある思ひはかなく
汽車動くなり

腰掛けてベンチにありぬ乾からびしあまたの
顔が我が前にありぬ

口かすを餘りきかずに別れしがま寂しきかな
懐しきかな

我らのかなし腫ひともの合ひたるがかの夕の灯にい
くほどなりし

蛙のはなしもやみぬ二人して遠き蛙に耳かた
ぶけぬ(眞鍮の火鉢六首)

煙草のけぶりの末も見えぬまで庭の茂りは暮
れてありけり

夕はやく冷え來る縁えだにうち觸るゝ寂し肌へを
顔はせにけり

向つ家の二階の窓ゆ暗き木に燈がさしそむる
ひそか心や

障子の紙もしめりぬかそかなる家ぬちに入り
て灯をともしすなり

二人して宵さびしければ眞鍮の火鉢によりて
火をふきにけり

春草の日陰の水にひとり飲む小さき禽の喉が
かはゆや(寂しき禽六首)

草の水細きかよわき嘴入れて小禽は眼をもつ
ぶり飲むかや

胸の毛の短か若毛をうち濡らし禽はかよわく
身振ひにけり

草の中の若鳥思へばあが胸の底にやさしく來
るけはひすも

春おそき光の中にいさゝかの草のかげして籠
るなりけり

草の中の寂し鳥にていつまでも其所にあれよ
と涙流るる

このごろは多く曇れりおろくに涙流れて籠
る日もあり

つとめに出でねばならず薄ら日の曇りの窓に
ズボン穿くひとり

ひるの土に下駄の音して入り來つる人を誰れ
かとひそみ居るなり

まとまらぬ疲れ心のおぼろかに法師姿が見え
來るかな

生きてあらばこのはかな身のほそくゝに髪を
おろして住む日もあらん

夏桑の茂りに壓おささるゝ窓の下いく日か經にし
我がよわき肌は(夏家居十一首)

夏の桑黒き青みにあが心日にけに染みて腐る
なりけり

疲れてあつき座敷にまろぶ我れに何びとも物
を言はずしてくれよ

斯うしては居られぬやうな底心かゆくなり來
る桑の光りに

はかなくひとりいねてあれ、今宵もあまた蚤
来て我をはむらん

父らしき臭ひすればか子らあまた暑く苦し
よりて来るかな

暑苦しく寝ころびて居れば汽車の響きとろく
と来る日も腐るかに

玉蜀黍の穂は思ふことなきやうに夕日の風に
揺り眠るかな

かひこが、皆死にしかば南瓜さる早さおそき
をいさかひにけり

虫が来てランプに鳴きぬ夜の室の古き畳に寝
反れる子どもら

わが燈は桑のしげりの奥深く死にて冷めたき
ものを照せり

萱草くわんそう花の夕日の川に出てしとき別れは其所に
待ちてありけり(三首)

夕日の朱あまを吸ひ盛まるくわんざうの花に男はあ
はれなりけり

今別れんとする心の静けさ、くわんざうの夕
日の朱あまは死にて動かず

山にしてはや秋らしく鳴く虫を抱きてやりた
き宵ごゝろかな(木曾鏡原六首)

雨たまる驛きりの道にうすらなる灯あかりりをなげて櫛
賣れるかな

重もくしき木の屋根並びらまや路を盡ひそ
やかた我行きにけり

山にして虫なくなべに峽の底家も沈みて行く
心地かも

河みづのあの幾筋に分れたる砂原に居らば寂
しかるらん

夕白く河原母子草のうち靡く川はらに來て見
るさびしさよ

雨あがる夕べの寒さ何所よりか日影洩れ來ぬ
襖の上に(家居四首)

桑つみに行きたる妻もかへらねばあのれ一人
を暮れめぐるかな

家の隅桑に飢ゑたる蠶らもわがともす灯をう
れしかるらん

畑の上黄の蔓枯れのいちじるく夕にほひつゝ
黒ずみにけり

向ひ家の南瓜の花は屋根をこえて延び來るか
な黄の花を向けて(南瓜の花五首)

南瓜の花見てあれば啞娘いくたりも來て窓に
並びぬ

うつくしき啞娘らがあはれげに南瓜の花にか
へりゆくかな

暗し／＼かの唐茄子の花底に蜜吸ふ蛇もくさ
り居るらん

娘が、工女となりて行きしかば南瓜の花に家を任せぬ

まだ解かぬ荷のかたはらにあはれなる我が子を
おきぬ毛布をきせて病院の前の下宿九首

膝の前の冷めたき穴に重もくくと幾日の灰の
濡めり居るかな

壘の、久しき冷えが三人を待ちて居しよな座
わり心かな

あはれなる父は、となりてすわり居るあが膝
すらを疑ひにけり

いづこに今日來りしか知らぬゆゑに母の膝べ
に眠り居るかな

すぐ其所に見ゆる怖れを黙しつゝうつろの部屋を見まはしにけり

疲れつゝ眠り入りたる子のそばに帯をほどきぬあはれなる妻は

寂しき、二人ごゝろのしたしみに茶のみ茶碗を買ひに行くなり

ひそましき障子のけはひに來て觸るゝ夕日にも心寄る我等かな

夕まぐれ街に沈める煤照に灯火鈍くにじみそめつゝも(岡谷三首)

けむりの街冷めたき人の眼のごとき雨が降り來て肩しめるなり

ふいごの、火を吹く光りに人間のをはりの顔
が赤く動けり

稲の色に雨ふる晝の静けさに沼の肌へに舟う
かぶなり

静かに暮れゆく沼に黒き舟波動かしてあさり
居るかな

雨もよひ暮れひそみたる沼の上うれしや舟に
灯がつきにけり

露らしきうすき濕りにつゝまるゝ遠き灯あかりを戀
しみにけり

町の灯の遠空明かし濕りたる夜のけはひの水
にほのかに

毎晩、もみてもらはねば眠り得ぬ氣だるき肉
と今はなりつゝも

按摩の、指のさはりのうつ／＼と疲れねぶりに
ねぶり行くかな

この一室いばまいばん頬を寄せ馴るゝ火鉢ひとつ
はかはゆかりけれ(東京十四首)

おのが身に思ひかへればつまらなく火鉢の炭
をつゝきて居たり

あはれなる我身を見じとする心火鉢の灰に唾
吐きにけり

今はこゝろ分らずなりぬ煙草をば吸ひ吸ふま
まに口苦がくなりぬ

夜の街に出てて来んかと思ひつゝどよみの音
に疲れたるかも

夜の街どよみを止めぬ灰の上に火鉢の縁の影
する寒さ

牛屋の、鍋の香による人だから其のなかの我
が膝がしらかな

都の、どよみの灯影とほく来てこゝにひそめ
る濠明りかな

丘のうねり暮れ靡くかな夕焼の雲の下には街
の灯見ゆれ(鬼子神六首)

武蔵野の芒の鼻買ひに来ておそかりしかば灯
ともしにけり

大槻の冬木の家に灯ともして銅の錢かぞへけるかも

暮れて洗ふ大根の白さ土低く武藏野の闇はひるがりて居り

歌集を編みてやるよりも死ぬる前に一目逢ひたらばうれしがりたらん

泊らずに歸りし事を東京の郊外に来てさびしく思ふ

丘陵の芒見ゆるにうれしくて家のことはや思ひ居るかも(歸郷八首)

疲れたる頭にしみる野の空氣うれしや朝の車の上に

田に並べし新築東も家の妻にこの日かへるに
なつかしきもの

大根こぐ少女を見れば丘の其處に我が家も近
くある心地かな

谷川の白くするどくいつまでも我につき來ぬ
トンネルを過ぎて

谿深く夕焼の空の我が顔に赤く照りかへるこ
の寒さかな

汽車の戸の雑木の夕日生れたる寂しき國に今
かへり來つ

まこと我を待ちてありやと冬の木の目ぐれの
國のなつかしきからに

野のものみな刈らるれば粗末なる土製の國に
霜むすぶなる

大根も秋菜も漬けぬ村の女は庭べの土に粟を
うづめぬ

襟の、冬葉のかげをくぐり居し禽の羽色はふ
と見えにけり

柿の皮剥きてしまへば茶をいれぬ夜の長きこ
そうれしかりけれ

夜寒の手栗を焼きたる眞白き手さびしかりし
手うれしかりし手

くどく言ふ女の前におとなしく煙草の烟をふ
きて居りけり

水だまりじめくくと草の枯れ寝たる重みにあ
が眼は堪へかぬるかな

すぐ其所に、粟稗の畠、白樺の裂けたる幹、
獣の女

破壊れたる女ぞと思ひ向へれば今はくよくよ
愛しくてならず

疲れつゝ寝入りて居りぬ壊れたる心うつくし
き寝顔なるかな

ありし日の少女のやうな眼してなぜに今宵は
迎へくるゝや

酒のめばほろく泣きぬ今は何もあきらめて
ある我が膝にむきて

大正二年

この夕べ柱にかけし洋服の皺は寂しく垂りて
あるかも

今の我をすこし押したらばそのまゝに倒れん
とする日は暮れにつゝ

わが側かたに農夫一人黙だまりつゝありと思ふも疲れ
んとする

茶を飲みて心静まれ長靴の重みが足につきて
居るかな

○

丘陵の冬の林を裂くやうに白樺の幹の夕幾ゆが條すぢ
も(林中五首)

おのが身に思ひ落ちゆく眼をあげて寒き木肌
に守られにけり

一と平芒黄いろの日のたまり林を出てし身の
けはひかな

道のへの石のかげにはいち日の霜消えずあり
わが歩みかな

遠くの、灯をこひしがる我が眼つき冬の林の
空透きたるに

氷のいろ太陽に緩りぬれば船の腹地上に赤く
塗られて居たり（諏訪湖八首）

船孤つ丹に塗らるればさびく日に日は雪山の
かげに没りたり

ま寂しく生れたる身は山かげに赤き船浮く湖
を見にけり

いと長き冬よりさめてさしやけき波は寂しく
動きたるかな

孤ひとりつにて浮ぶ舟ふねの船この春も山の湖水にひと
つ舟ふねの船

このやうにあはれがりつゝ身は今は赤く濡れ
たる舟ふねに寄るかな

平板に馴れし眼をこそばゆく明るき雲に今あ
ぐるかな

心よわくなりてある身を大切に山べの家に寝
にかへるなり

落葉松の萌黄の芽ぶき快樂の日は心臓にし
び来るかな

萌黄の目林にみちて健康の丹ま頬ほの少女をとめを歩ま
せにけり

うすくくと暮れ入る丘を汽車のゆげは赤くや
はらかく流れたるかな

ひそか灯に今は別るれほのくくと雨ふる道は
曉けてゐるかな

両側にいまだ眠れる家のさまわが身のけはひ
のいとほしさかな

街道のほこりにしめるこまか雨心は今は消え
んとするに

心よわき我なれば今町そとの雨に佇みて息を
するなり

ひそかなるものを遺して遙々に歩めば今は一
人なるかな

野をとほく歩めるなべに落ちゐつる心ふる々
々泣き出でにけり

わか／＼しき草の平地に出でしかば向股かゆ
く快くなれるかも

嫩草の歩みのさはりしみ／＼とさびし心の流
れ来るなる

誰かに行きたくなりぬま寂しき草のみどりに
身は冷えぬれば

五六本様の若芽のふく見つゝおのが胸べに手
をさほるなり

子どもはみな悲しさうなる面わしてあが眼つ
ぶれば来て並ぶかな

奥蝦夷は草崩えたらん裸にて體ばかりにかゝりてあらん(弟の殿兵検査に五首)

公の徴しに召されて今は行く身は細々とやさしかるかな

やさしく汝れを生みたる父母は手を額にしてうれひたまへり

膏けのみなざりさかる皮膚の張りわかき男の裸體おもほゆ

島に住む男のからだ氣の張りの少しよわりて草をふむらん

折からよ汽笛あはれに聞え來れ雨ふりにふる
晝萌黄原

鐵瓶の下しらくくと燃えぬればあはれなる晝
の雨は降るなり

下男らは爐に足投げぬ檜若葉雨白々と吹きさ
かる今

廣き圍爐裏女の眼には春ふかき萌黄の雨のし
みて來るなり



明治四十一年

中
村
憲
吉

竹

山の根のけむり立つ家の棟のうへに孟宗の簀
しだれかゝれり

音きしる拮榉けつこの柄はもうさうの風をよぐ葉の
なかに動くも

月の夜を霧にぬれたる竹垣のひかるが上に吾
が影行けり

○

女竹垣の桃の根かたを揺ぶりて犬いてし後を
花散りやまず

新酒桶を伏せしかたへに割る竹の竹紙かろく
春風にとぶ

椿

つばき垣にたてかけ乾せる疊にし花ころび落
ちて前にたまれり

山路の青葉かげろふ岩の井に花つばき朱色に
さびて映れり

櫻島すその松山松まじり咲ける椿にうぐひす
啼くも

○

白晝ハクジツの湯ユに湯氣ユキのなかより窓マドあくればほの赤
つばき覗ノゾきけるかも

雑詠

唐湊カラナウ山ヤマに日は入りぬれど海中ウミナカは櫻島嶺サクラシマノカのあか
あかと見ゆ

むらさきに煙ケムリを吐ハクきて霧島キリジマは向か國ムカクニのそらに
静シズかに浮ウけり

庭隅にゆふさり來れば眼のごとくボンタンの
實ほのか光れり(ボンタンは柑橘類の一種)

背戸のべは朝日子さして批把の葉の霜解の雫
したゝり居るも

甲突川に浸せる布の紅色のゆらぎゆらぎて春
の日さすも

亡兄を悼む

明治四十年九月二十二日、陰曆満月の夜
廣島の客居に年二十二にして逝く

灯のもとにふと思ひづれば亡き兄のくさぐさ
のことが吾れを泣かする

○

ひむがしの街より月のうらうらと上れる頃を
眼を落しけむ

はらからの縁^{えん}みぢかく生れ来て遠世へいなす
眼にさへあはず

枕べの月照る河にさわさわと何か水^{みづ}おとに立
ち行きにけむ

その夏のある夜はいねず月かげに枕をならべ
て語りけらずや

吹上の濱

松みなが砂にうもれて稍ひくゝわが眼のほど
につゞく松原

海の邊にかへり見すれば濱のうへ砂高みかも
山僅かみゆ

砂をかの裾をめぐりて川ひくく夕映の色を海
にそゝげり

空とほき星のあかりに砂原は路かげくろく雪
夜のごとし

ほの白く闇に起きふす砂のうへ海のきはみは
星の空かも

○

浪かぜのやみ礎にたちて鳥はいま消たゝまし
くもわが上を過ぎし

松越しに海みつゝ行く小まつ原ゆふ日にたま
に鳥のたつかも
夕づく日砂の高みにかぜ跡は波かげのごとく
光りをるかも

野間嶽

夕ぐれの山面を流る霧裡の近きくさ間よひと
下りて來も

飛ぶとりの影も小ぐらくつゝみ持ちて霧はな
がるゝ松の谷間を

○

雨の嶺はのぼり詰めしを目の下に海暮れをれ
ばうつゝとしも覺えず

ふもとなる雨に暮れゆく暗き磯にしら木綿浪
間ともる灯が見ゆ

雨霧はくらし麓よしらくと嶺に立つ吾れを
吹きぬらし越ゆ

峯の上のひくき夜ぞらよ三日月のあはれなる
かも覗きて行けり

夜の樹々にふと風おちて峯の霧の物の化のご
とたゆたへるかも

遠つゞく雨のまつばら風なごみ葉にまつはり
て煙はちらず(加世田海岸)

明治四十三年

溪底の湯

溪底は月影くらき水ぎわに湯の小舎ひとつ灯
ともし居れり(鹽浸、鶴の温泉)

ぬるま湯に仰向き浮けばわが胸に窓越しの星
が濡れつゝ落ちぬ

谷底ゆ上ればひたに眼にせまる黒き山尾に沈
む月かも

谷にのぞむ宿に眠れば耳に遠く地のそこ遠く
水の音きこゆ

○

蒼杉のしげる木立のをちここに櫻ほのぼのと
明るく咲けり

旅宵の千鳥

熱に病みて思想あやしく亂る夜を闇のそこ遠
く呼ぶ千鳥かも

騒がしき白晝に堪へねば夜の底を愁はし影に
歩み居るらん

沈む夜の耳にまつはる瀬ひよきの奥所にし聞
く深き静けさ

もの思ひありつゝもとな忘るれば空虚ごゝろ
に身に入る千鳥

堀内を悲しむ

十月十七日、黎明未だ動かざるに
彼没すと云ふ。年僅かに二十三

冬の夜のかく淋しさに訪ひ行けばかの眼光は
も戀ひ迎へしよ

ある夜は泣き居たるあとの眼を恥ぢて繕るふ
汝れをいたしく思ひさ

泣きしかのそのこと問はむもいたはしく問遠
の語りにうら解けん程

なごみく語らひ行けばおのづから汝が面は
るゝに吾が心さへ

語らひのすゝむにつれて更くる夜を淋しきな
れに戀ひ負けてありき

眼つむれば影に浮きくる眼光まぶしに戀ふも術なく
吾れはくるしよ

わたつみの底鳴る音の深きこゝる汝が胸の戸
によりて戀ひにし

胸ぬちにゆするこの思ひこのまゝに物にひと
かず消ゆるかなしも

もの皆に響き足らはすこの頃の消なむ心に汝
を戀ふるかも

○

玉きはる生命かなしくありし夜はなれに診ら
れて死ぬことも思ひし

いまはべの冷えゆく指を父はゝの胸べにあき
て逝きし子ゆゑに

雪來る前

日の暗み野に満ちくればこもり居て吾れにか
なく心ゆらぐも

曇る日のこゝろを傷み野の空に虚吹く風を寒
みつゝ行く

野も山もくもり沈みぬ遠く来れば世は温くぬ
くと風立たずなりぬ

天地の冬さびしつゝ會ひよるや沈黙の曇りを
ものゝ散り來も

おほよそに思ひ設けたる胸のものを今やぶる
かに此のふる雪よ

歌會の歌 (1)

雨雲の重くながるゝ空のはてにおごそかなる
かもよ日に照れる山(十一月、茂吉庵小集)

雨空の眞暗きはたての山の間に高原のながれ
日にひかり見ゆ

春の野をながるゝ水のさらさらと振舞ふ君を
憎しとや云はむ

いさゝかに振舞ふだにもあやぶめば母にそむ
かむ心ほりすも(十一月左千夫宅)

明治四十四年

寒き石

夕日かけ寒けき崖^{ツツ}を石のいろの上に物うごく
小鳥にてあり

夕ちかき枯野をあよむ足のへの眼^{まなこ}にさむき石
の肌かも

石の面にふるゝそよ風かれ草の影のゆらぎを
うすく置くかも

野にのこる日の薄らひの淋しさを石に觸りつ
き泣かまくするも

夕暮るゝ枯野の沈み眞悲しく心をなれと石に
よるかも

眞悲しきこゝろに堪へず面伏せば風の歎歎に
草のなげきよ

石に居る野べのこゝろに日の温みの残りを戀
ふも淋しかりけり

曇り風

くもり風ほの蒸す街のもの重く人おもくくと
うごき行くかも

いらいらする心をまちに出てあゆみ曇りに歩
む我れうつしなに

物賣りの戯^{たが}けのうたを聞きければ真^ま晝^{ひる}の街に
足もすくみぬ

○

黙々とひと行く街を高らかにうたひし唄のか
なしきかもよ

飴うりは立ちとゞまりて頸を延べ鶏のごとく
にしてを唄へり

飴唄のいき繼ぐ見ればくしやくしやの顔ほど
け来て目鼻ひらきぬ

飴賣りのおどけ悲しく曇り街に面そむけつつ
走りゆきけり

わらべ等は彼のあかあかと唄ひいづる喉の色
はも見てを立つらむ

とほく来て胸和みつ彼の面に忘られぬもの
を思ひ出だせり

しまらくを眼をひからせし兒の一人いま地を
打ちて去り行きけるも

少年の影見送りて見かへりつ館屋の業をか
なしと思ひき

曇り日の都大路に今日いててこの我が見つる
生きの業はづかし

歸りゆかば妻子まつらむかしかすがに父らし
き面も次がつくらむか

春動く

砂まじり木並にさやぐ風もぬくみ日日のちま
たに人も増加つゝ

い群れゆく人の衣のちらちらと色にはほへる
街の上の春

小雨ふりてぬくむ野の上はかれ草の色やはら
かに眼に新らしく見ゆ

和ぐもり雨ふりやみし道のべに枯れ草のいろ
ぬれて垂れたり

落ちゆく眠

わが息のかそけき音をそのまゝにうつゝ、静ま
り睡りゆくかも

物よろづ消えぬになりて吾がうつゝ、凡にを
かしく隈に残れる

薄ら夜

四月九日松本市より迂回し來りて歸京
の途を夜佐久高原をすぐ。微雨はれて
月うすし。かの物すべて亡友の記憶を
呼べる旬日の滯在は今は淋しき夢の如
く、車窓によれること只久しきのみ。

冷やびやとしづむ夜の原月うすくまばら林に
家もこもれり

枯れ立ちの林にこもる壁のねむり月照りくれ
ばしるけく浮くも

しらじらと夜の更けゆけば新芽はなふく森に籠り
てぬる夢ゆめを思ふ

輕井澤驛に着きたる時は夜もすでに深
く汽車また此處に果てたり。驛前の旅
舎に黄燈の下に直ちに今宵の夢を眠ら
むは悲しく、野に出て、影の如く彷徨
せんことを類に願ひぬ。

もの思ひのかなしき胸をひと知れずうす月の
野に泣かむとて出てぬ

宵ふけて吾がゆく野べを草の家にくくと鶏啼
くあはれ月夜を

亡きひとを思へばさびしくゆく野べに風ほの
白き夜のくだちつつ

この潤む野の幽けさよ面影をさながらにして
友が死にしと思はぬ

高原こうげんにこのうすらなる夜をふかみ泣きつゝ、
に消きなばとぞ思おもふ

涙なみだ盡つきて頬ほに吹きくる風かぜごち夜の原はらのうへ
に和なごみをるかも

○

うるほひの宜よろしき宵よを野のにたてば汽車くるまかもと
ほく足あしにひゞくも

汽車くるまが来きとちもひ設たけつゝ野のを行いけば遠とほの森もり
端はにてれる信しん號ごう燈とう

雲くも明ありほののに動うきて沈しづみよるこの高原こうげんは草くさも
ねねひれり

燕の腹

雨のいろに冴えひかりたる青葉路をつばめの
腹のひるがへり見ゆ

青葉路のあめの濕りの砂のうへ燕とわれとよ
みつゝぞ行く

つばくらのちひさく啼けば葉にぬれて日かげ
のうすく波れこぼれけり

(三井寺路上)

青葉の息

青葉ふかく人にかくれて吾がいきを永世とよよにつ
けば悲しきろかも

吾をつゝむ樹の葉のゆれの青々と胸にうれし
き生命いのちをゆるも

夕べ野はかすかなる世にそこゝと青葉の息
のたち嘆くらむ

山中のしづけき町に蟬の音の四方よそゝぎて
くれ入りにけり

夜すがらを山に鳴くなる蟬の音の夢しらじら
と谷あけはけり

裳裾かぜかろく踏みいる山路の夕べをとほく
日も落ちはてしかな

森ふかくひらけし原の草のいろに朧ろ寂しく
立てる人あり

草の香のゆるかさよ何日の世かの吾れの
かなしく思ほゆるかも

峽のいろ

かげろふ野邊のはたての谷の戸に消ぬべくも
あはれ旅を來にけり

谷の戸にかへりみすれば吾が道のゆふべを遠
く來る人もなし

ゆふ冷えの肌はだにせまれば谷の戸のちそろしき
色をあはれこの身に

蒼黒あざくろく暮れゆくいろにこもる瀬にきゝ入りけ
ればこの世にはあらず

谷の奥に蒼く消ゆべき旅の身をすぞろはかな
くかへり見にけり

静けさの極りぬれば谷あひを身ごゝろ失せて
やすけく行くも

星かげの淡きも見つつ行く谷にはからずも人
の宿驛しゆくやくに出でぬ

峽せきのいろは宿しゆくに入るとき野の暮れに尙ほほの
青く映え居たるかも

山峽の宿のゆふべの戸にすれば牛をかくみて
商へるあり

伯樂がたかく笑へばたそがれの冷たさかけに
尾を振りにけり

ともし火のほのけき軒の暗かけに悲しく牛は
長鳴さにけり

かくのごと現実ともなき谷なかの吾が住める
世はやさしく思ほゆ

黄昏の峽間の宿のまぼろしに吾が會へる顔の
うらなつかしき

秋のはじめ

秋づけば水際みづぎのくさに丹にの花のこもらふほどの戀こひに遇あふかも

せめて吾れまぼろしにだに遇あはなむと思へば今はさびしかりけり

雨晴れの石のあはひの夕のいろ静けき土に虫なけるかも

まづしき心にすめば眼にしみて田の面の朝に秋のいろ見ゆ

○

夜の驛の灯かけ寒けき前庭に砂舞ひ狂ふ入あらずけり

歌會の歌 (2)

冬の日の暫時しほしの晴れを人見えぬ野にいや
つゆる村の音かも (三月、左千夫宅)

とり毀こち物ちらばれる片町のさやぎも長閑に
さす日かけかも (三月、茂吉宅)

夕べ雨晴れし名残を傘のまま吾がふかく入る
青葉みちかな (五月、于規庵)

入日映はゆる濡れ葉のかけやもの云へばわが持
つ傘にふるへあやしも

夕窓の空のひかりに冷やびやと震えやまざる
葉の残りかも (十二月、百穂宅)

籠居かごりの庭冬さびて愁はしく雲のかげ落ちおち
ては去るも

○

冬鳥の啼さなくまゝに櫟原したびの笹を分け
入りにけり

大正元年（九月より）

雨の夕暮

雨のいろと青葉のいろに浸りたる今日のまな
こに日は暮るゝかな

しづかに見詰めてゐたる夕ぐれの冷たき雨を
ひさしと知りぬ

夕ぐれの雨をひさしく見つめたる吾れのまな
こよつめたかりけり

道そばの雨に暮れ行く木の間よりちちと短く
とり啼きたちぬ

向つ尾のゆふべの家は雨のなかに何ごともな
く灯をともしけり

○

さわさわと風鳴りいでゝ雨の野は泣くことも
出来ぬ寂しさとなりぬ

雨ふりて暮れゆく山をはるけくも入りてゆく
身が寂しかりけり

雨やみてやがて螢の見ゆる野をわが人力車ひ
とつ鳴りて行くかも

山ふかく雨まじり風吹ける夜のそこゆく人は
小さなるかも

母衣をうつさびしき雨にまのづから鳥のやう
なる目を閉ぢにけり

谷に入れば數みだれたる螢火の燎爛の世界は
狂ひ廻轉れり

谷のやみうすれ初むれば懐かしきほのけき河
が流れよる見ゆ

しづかなる峽の奥はこの夜の雨にぬれつゝ灯
を點すらむ

友かへりて

ざびくくと雨ふり出てし今日のひる友かへり
てよ久しくなりぬ

秋雨は夜にふりつぎて友のことばなほ寂しく
も残り居るかも

あたゝかに雨きく室にこもる灯のうら悲しさ
は女を思ふなり

かしの實の吾はひとり故わが友は妻まつから
に雨しとと降る

稻の月夜

ふとある夜月に起き出でて、山腹のくらし木の間をあゆみて居たり

月よみの息づくいきのやはらかき觸りごゝろの熟睡なりしか

たまたまに月かけ明き向山に哀れなる目をあくる灯のあり

ふもとには稲田のなかを眞白なる誰が行くみちぞとほく寂しも

○
ひとり行くこの月の夜に見えくるはみな吾が知れるひとの家かも

はらからも母らも家に眠るらむ吾れのみあゆ
む小夜更けにけり

稲のつゆに濡れつゝ歩む夜のはだへ座ろにひ
とに寄りたくなりぬ

山影のさみしきなかの安らかな稲のいろには
抱かれても見たし

をさなくて吾が飽くほどに垂乳根に抱かれざ
りしが寂しき夜なり

道々のつゆこる草になく蟲に聞きあまえつゝ
行くこゝろかな

かゝる夜のおぼろを行けば遇ふひとの皆なつ
かしく草かをるかな

憂愁の都會

たづたづと雨にもならず太陽の呼吸にみやこ
はあはれ朝よくもりぬ

物の音もひとゆく影もおぼしく曇りへだた
る街べを行くも

街にて、底べをゆけば曇りより知らざる顔が
あまた出でくも

舗石の上に曇影ふみつゝたまたまに己が足の
音にさめ返るかな

霧おもく下り沈みたる街並みにふとかすかな
る柳ゆれたり

何はなく寂しき街にぞろぞろと人ながれつゝ
くもり行きけり

街々のうごきのなかは霧くらく降りて居るら
むとほくとほく行かな

曉は動くに

静かにまなこあくれば他にまだ何かとありし
わがこゝろかな

にこよかに胸にもたれしものあれば不圖手に
とりて思ひ出でつゝも

きぞの夜はにどる灯かげに赤々と吾が目に咲
きし笑ひなりけり

獨寢の何時ものやうなこゝろにて目ざめしこ
との何か寂しき

戸のそとの世のあかつきは海に似てとほく寂
しく動き行くらむ

何鳥か幽かに啼きてほのぬるき眼の底は灯の
うつるなり

ともし灯は際涯なきかたの曉にふとさそはれ
て沈むことあり
何にかもあびやかされてふと覺めし哀れなる
ものはまた眠りたり

かすかにも眠りて行きし息なれば手に觸りか
ねつ明け行くかもよ

眼ぞこに笑みて静かに光りつゝ吾をまてるも
のゝこゝろ悲しも

ともし灯はいつか全く消えはてぬ吾が身もい
まはかくれ終りぬ

初冬の郊外

ひさびさに街出てくれば郊外に落葉せるもの
は盡くせりけり

ひと群れの落葉林はくるぐろとこもる樹あり
てけむりも見えぬ

冬がれの林のまへに燃ゆるごとき見の惱まし
き大根畑ありき

垣越しに竹むら見ゆれ夕ちかくやゝあかき日
にふるへ居るかも

郊外に空くもり来る夕まぐれ「天」の法律學校の
所をすぎぬ

街かたのとほき没り目を背にしてこの土手道
に吾が影ふむも(向島六首)

足とめて静かになれる土手の上をひとの足の
音のよりにて来るかな

宮のおく行き詰るところ冷やぐと木の間の
家よ三昧の音きこゆ

山茶花のしろき一本わがまへに木かげに口を
顛はせけるも

土手下の小さき池面にどこよりか煙の來ては撫
でゆく寒さ

水ぞこに土手の樹映りたまたまは逆さに人の
うつりて行くも

雨の夜

雨だれの氣倦るき宵のふけゆくになほ私語く
は嫉たきひとかも

かゝる夜をものの音たゞば尾をゆりてとほく
幽かに消えいりぬべし

汽車が峽間の驛にとまりて釜鳴りするが山にさびしも(藪原)

大正二年 (四月迄)

雨久花

九月十日。それ迄の十数日間は木曾蔵
原の御寺の陰氣な奥座敷で只だ一人晝
夜を超絶した同じ静寂の中に包まれて
毎日暗い雨の音を聞きながら法律と經
濟との書物に殆んど讀み疲れて居たの
であつた。而して又自分の身邊には

ら殺しても殺し切れぬ蠅が夜と日とな
く黒い天井からベタ／＼と落ちて来て
は集つて来る。それが一寸駆つてもコ
ロリと動かなくなる程生命力の弱い蠅
なのだから何だか自分が罪障深い身で
ある様な氣がして空恐ろしくなつた時
であつた。て丁度その日に急に雨が晴
れて又松本市の亡友の宅から皆で歸京
の途次の訪問を待つて居ると云ふ音信
があつた時には全く自分は明るい世界

に救はれた喜びに顔へ上つたのである。
私は躊躇なく荷物を整へて蕨原を出發
した。午後である。でも流石にその峽
谷の景色と又御世話にふつた友と寺僧
とに別離の愛惜を感じずには居られな
かつた。加ふるに霖雨の後の高原の國
に既に限なく降りた秋の最初の冷氣は
汽車の道々自分の心を歸京の悦に躍ら
して計りは居なかつた。野の到る所に
咲き亂れた寂しい秋花、そここゝの畑

から匂うて来る蔭に亡びんとする幽香の香、さう云うものも又坐る私を温やかな追想と省思との境に誘ふのであつた。たま／＼桔梗ヶ原を過ぐる時には私はこゝに好むで遊んだと云ふ亡友の追想に沈みながら茫然と永く外面に見入らざるを得なかつたのである。かくして私は日暮に近く松本に着く身となつた。巷では近く帝都で行はるゝ御大葬のことが語らるゝを淋しく聞いた。

野の花の目に揺れのこる今日をわれ夕暮れに
つゝ家に來れり

今日の野は風ほの白く目覺めたる花を思へば
寂しかりけり

道々の秋野に花はゆらぎたれど尙ほ眼をとぢ
て見たきものあり

花をゆりて淋しく吹きし野のかぜに人行けり
しが影のごと思ほゆ

眼にのこる彼の野はとほく吾が友の死にゆく
影がいま行けるかも

この庭に草おとらふる頃はすてに死ぬべくも
みちは行きそめにけん

夕暮るゝ家に來たりて亡きひとの話にいまは
眼をつぶるかも

亡友の家に入った時には家族の人々の
寒げなる羽織姿を見た。数日の雨冷え
の名残である。それも何か寂しいもの
に思ひなしたが尙ほ寂しく思つたのは、
母君と私とを殘して家の人々が一時暮
方の室を去られた時であつた。母堂は

亡友の三年の法會にこの十月半頃京都の東本願寺に納骨に行きたい等と言葉しめやかに語られる。もう左様に年月が経つかなあと今更のやうに心細く思つた。彼は京都醫科大學に籍を置くと間もなくその地を踏まずして死んで仕舞つたのである。誠に可憐なるは夭死した彼であつた。けれど斯様して痛しい母君と對坐し又かうして薄冷い夕べの空氣につつまれて居ると寂しく哀れ

なるは彼ばかりではなかつた。考へて見ると自分は大抵親しい者には秋に死なれて居る。庭を越えて倉の白亜には微かに夕空の色が映えて居た。

ひと逝さして三年と云へばその母と夕べしづかに居るころかな

此處よりはそらの眞洞まどうの夕のいろが遙かはるかに眼に見ゆるかな

土の上に暮れゆく身にはむなしくも彼の高天
に鳥消えにけり

空とほくもの思ひ居ればそはそはと軒のもの
屑ゆれて来るかな

小庭べにひそかに面をそらしつゝ息長づけば
土よ湧くもの

我々の間には語り詰めた話がふと絶え
る時があつた。さう云ふ時に外面より
街の音が騒然と且つ微かに響いて来て
室内の空氣は刻々と暮色を増して来る。
……と母君の眼は愈々思ひ深く痛しく
輝き出でて、而してはともすればそれ
が自分に優しく悲しく注がれて居るの
であつた。私は只だ出来る丈け身を温
和しく坐つて深い思に沈んで居た。街
の音は尙ほ響いて来る。死んだ彼も幾

度かかうした夕べをこの母とすごした
事であらうと思ふと今がつくづくと堪
へがたくなる。

壁のうへに冷たく暮るゝ肖像せうざうにたまたま我れ
は目もそゞぐかな

相向ふひとの息氣のいまは手にとるが如くに
ふり嘆くかな

しとくくと身にふりきたる夕暮れの今は淋し
ゑ立ちても行かな

風そよと鳴り行きにけれ驚きて目を上げぬれ
ば母も見しかな

このゆふべ母のまな子となりたれば心ごと
となみだに濡れぬ

ふと見ると我々の前を一二間離れた庭の上に青銅の蓮形の水盤が立つて居て、水葵の花が一杯に暮色の中に咲きこぼれて居る。この花は誠に嬉しい然し又淋しい冥想に人を誘ふ薄紫色の花である。二人の眼は永くそれに注がれた。

『我々の仰ぐ天は何時までも情緒の空でありたい。而して夫れは驚異と憧憬と冥想との空であり度い。』とかう語るときには死んだ彼は何時も深く静かにその

眼に燃ゆる物を輝かして語つて居たのである。その後生き永へて彼の生命が如何に展けて行つたにしろ恐らくこの氣氛より離るゝことは欲しなかつたであらう。而して私はこの静かなる夕暮の空氣の中に甚しく情緒の緊張を覺ゆる今の場合目前の花に凝視しながら髪ととして彼の面影の象徴シンボルを見んとしつゝあつたのであつた。母堂と自分の間にはもう話もやむで居たのである。

夕ふかくいろ凝りたればくきやかに眼の前の
庭に花みえ來たり

水盤は暗く冷たく地にうきて現心もなげに咲
きし花かも

むらさきに咲きたる花のうつなさ苦しくも
母の目より離れず

あが眼まなこやさしく濡れてものいへば花は微かに
動くとするも

花の面はなにか醒めつゝ來らしきに夕べ流れ
て夢のごと悲し

雨久花あひづみてゐるうちに二つ許り夕べの花を開
きたるかも

花のへにそよると物の消えしかば吾等おもはず相見けるかも

かすかなるもの眼を開けておどろきぬ我れと母との夕べ花かな

何もかも冷たく暮るゝ庭にいま明るくさして灯が點りけり

かはたれの庭に今まで見しものは亡きものと知りぬ耳にこぼろぎ

灯の色のやさしき中にたらちねを今晴ればれと見出でつるかも

○

乳房ある御ほとけ見れば幼な兒のをさなごゝろにうれしくて泣かゆ

日没後

吾がための今日の野行きは暮れんとす道いち
いちになつかしきかな

日暮るればわが一行の夏すがた野をかげり如
くかへりゆくなり

かへり路はなぐさにすれど影のごとく身をめ
ぐり行くひとの悲しさ

路のべの暗き夕べの花の色に見初めしもの
かなしかりけれ

蟲なけば道にとまりて吾れ暫時ひそかに汝に
告げむとするも

野のかなた優しきこゑの呼びたれば遅れたる
身をいそぎ行きけり

○

かはたれの野の停車場のあわあわと點れる灯
には歸り來れり

驛の灯に汽車まだ入らずいたづらに小兒らが
來てさわぎ居るかも

汽車の間を夜の構内に蟲きくと酒たづさへて
ふたり入りけり

構内の草に灯あかりさしたれど其處をば避け
て暗くすわりぬ

木棚ちかく殊にしきりに蟲なけば手に分けに
つつ草藉さにけり

わらはべは吾れらをさがしのこゝと只だひ
とり草をふみて來にけり

偶然たまたまに草にこぼれし酒の香の湧きたつ風の吹
き行きけるも

わが前の夜の目に二つ相似たるまなこ光りて
並びたるかも

をみならは町見に驛をいづるらし灯の彼方よ
も歌の聲きこゆ

○

草の上にふたり小暗かすみくすわり居てこぼろぎ聞
けばやゝ哀れなり

遠さへに小雨のごとく鳴くむしに身も濡るゝ
がに聞き入りけるも

草の上の夜の目に近く時たまに霧のごときも
の過ぎつゝを居り

足のへにふと蟲鳴きほそり行くこゝろひと見
まもればほのぼの寂し

吾がそばに人の足べに蟲ひとつ來居て鶉ける
が哀れなるかも

ひとは今ことば悲しくこほろぎの吾が耳ぞこ
にかたりけらずや

蟲の音にひとの談話はなしにきゝ入れば現し身なく
て涙ながれき

こほろぎよ勿な鳴きそこほろぎ野邊はいま月う
らうらと出でんとするも

萌芽

ひさしくて見ればかゝげし妹の髪のやゝ解れ
垂りて憎からなくに

橘花のいまだ含めるわが小女にかすかなる香
を聞くうれひなり

眼痛し

木枯のくらしき市路にあかあかと灯を求めつゝ
來たりにしかな

家のなかは眼にくれなるに紫に動きしものが
囁りたちて

賑はしきひかりの前にことさらに面映ゆき身を立ちても居りし

○

ひそかなる街よりいでし晝すぎを他人の眼痛く歸り行くかな

世のものに久しく遇はてありし如こゝろさみしく街ゆきにけり

風さむく街に吹かれて出でしかば我がゆく影のあはれなるかも

うすれ日はをりく晴れて街なかに明るくもわれを行かすことあり

ともすれば面にうすく夜の髪のかゝれるかにも手に拂ふかな

巷には影うすれつゝ陽のまへを人ゆけりしが
なほも行きつつ

すさみ行く身に思ひかへる悲しさにこの踏む
道の砂ぼこりかな

夕されば更に悲しく街の音の身をゆりにつゝ
湧きて来るかな

からからと荷ぐるま鳴りて来るかな我が前に
柄をなげて仆れ砕けよ

○

神経のまこと弱けれこの夕も永遠とこの別れと思
ひてかへる

崩え初めて乙女さびして生ふれども愛なまし子ゆ
ゑに言ことば觸ふりかぬつ

深宵の停電

街とほく消えゆく音をのこしつゝ、我が電車の
まは暗くとまりぬ

街のうへは遠くひかりて停電の電車幾列もと
まり居るかも

停電の街にとまりて外をさけば夜はひとしほ
に更けて居しかも

電線に雨そゝぐごとき音をして電車いくつも
來ては停りぬ

外あかりは蒼くつめたく車箱のなかの人等の
面にふるへけるかも

窓をゆりて行く風のあり私語は蒼寒く車箱に
うまれ起りぬ

暗き窓に街うかゞへば瓦斯の灯に木影を稀に
行くひとの見ゆ

大き都會は眠るとすらむ夜の路に哀れなる反
古ひとつ轉がり行くも

秋の光

秋の野はひとに遅れて花つみて口ふれしほど
のひそやか心

はつ秋の日のひかり吹きてさやさやと何か笑
ましく風の行くあり

蝶々の身をはなれぬは兎もかくも衣ずれの音
の狂ほしきかも

手はわれは握るとしつゝ氣をつきぬ道にゆれ
たる我毛香かな

むらさきに小さき花の目あぐれば野は行きつ
つもつゝましくするも

夜の感傷

弱ければひとに嬌ゆる我がこゝろ今宵もあは
れ息づけるらし

街々の光りの前は呼吸ふかく吾が來たりけむ
しらじらと思ほゆ

歩みとめて止れば路に闇ふかくすべて静けし
この心かな

遠闇は風かも消ゆる聞きつゝを孤獨ひとりごゝろに
眼を閉づるなり

もの思へば空のあかるみ夜の暗さ、しかして
我れのかへり行くなり

御茶の水景情

曇り日の眼ましたの濛にどてのいろ青く映うつりて
光り居るかも

やゝ遠くに濛を蔽へる樹のしたを舟ひとつ見
えて漕ぎかくれけり

ほり底に舟木隠りに消えしころその木ぬれに
は砂吹きしかも

壕の上を砂吹きゆけば樹末よりニコライ堂は
高く見えたり

ニコライの屋根みてあれば樹のかなた学校の
べるの鳴りて居るかな

秋淺き木の下道を小女らはおほむねかるく靴
ふみ來るも

街上に車馬ゆきかひてをとめらの群れてかへ
れば我れあゆむなり

いまし方を思へばまこと舟一つこの標底を漕
ぎ行きしなり

○
街なかはこの塹壕ぞこの青ぐさに小舎ひとつ
あはれ見えて居るかな

街の砂の日ごと降りきて久ならむ壕底小舎の
屋根に積り居る見ゆ

小舎の戸には童子ひとりが遊びゐて何時まで
も経てどのぼり來ぬかも

ほり水のよどみ濁りて流れねばそこに居る子
が哀れになりぬ

向う側にいま堤防かげを音蹴立てて火を散ら
しつゝ電車はしりぬ

電車すぎて何かしづまる壕ぞここに暮れかたの
水顛へ居るかも

ほの暗き壕のそこべに上りくる荷のふね見つ
つ去りゆきけるも

工廠こうじょうの笛鳴り揺りて夕壕にあはれなるかもよ
船の唄を聞きし

街のへに面ふり向けば降りしものぬぐひたる
手は煤に染みしかも

○

この夕べの九段のそらに富士みえず赤く煤け
て日の入る凄さ

夕映はとほく照らねば眼のまへの坂にはくら
くひと影ゆくも

灰色の雲の下びに低く見ゆれば下谷したやの街は死
せる色に見ゆ

冬より春へ

わが汽車の野をゆき居ればあとの驛よ他へ別
れゆく汽車の笛きこゆ(篠ノ井をはなれて)

雪野原とほき窪みに晃らかに夕さり来れば町
の灯が見ゆ(浅間温泉より松本市を望む二首)

湯歸りのひと行ける見ゆ野の雪は蒼くつめた
く暮れて来るかな

灯のもとに我等ふたりを残り置きて宵はしづ
かに遠去りにけむ

灯のもとに物かき居れば面ちかく書をくる音
のやさしくきこゆ

更くる夜にきゝ入りければ胸ふかくわれらの
呼吸は吐きあひしかも

夜の重さ欠呻したればふと我れよ去るものあ
りて安けくなりぬ

伽羅沈香を買はむと市に出てし夜騒亂のある
を見に行きにけり(三月十日)

籠居のこゝろの暗さ塀そとに羅宇屋きたりて
久しくなるも

羅宇笛は息吹きやめずじめくと耳にこゝろ
に突き入りくるも

街とほく彼のもの音のきこゆるは今追はざれ
ば逃げ行く如し

夜に入れば世はおぼつかなくて戀しさに今宵
も家はいでしなりけり(三月)

宵はやくねむれる街のほのかなる光りのなか
を酔ひかへるなり

もの思ひなほ起き居れば下宿屋の夜を二時に
して地震はゆりぬ

夜の地震すぐやみしかば電燈のゆれの名残も
見守りにけり

地震ゆりて夜の三階に起きし人わづかありし
がそれも静みぬ

あひ見てよ五月經ねどかの友は春たつ今日を
婚りけらずや

あしたより風ぬくみ立ちてそはそはと木並に
街に落居ぬ日なり

かりそめの身の過失あやまちのことごとく世に惱しく
春立つらしも

もの皆のぬくもる今日の春かぜの都かなしく
野を戀ひ出てぬ

野に出てゝはつはつ萌ゆる若草の色よろしみ
と妹こをしぬぶかも

街の音の長閑にひゞく晝すぎを兵營に櫻ゆれ
て居るかな(四月)

この夜のこゝろ細さをゴウガンの「若き母の像」
を枕まくらきてぬるなり

街のうへは朧ろに黄なる月出て、夜更けてぬ
るく風荒ぶなり

歸るとき人目をしつゝ見ざりしが夜の街を來
つつ寂しくなれり

向か台の街裏ゆけるをとめらこゝの庭べの木
の間より見ゆ

飛行機

縁日えんじつの人出のなかを吾がそばに兒供走りて叫
びけるかも

群衆の顔は一時に湧くごとく空をあふげり日
の降りそゞぐ

なか空は遠くはるかに水のごとき光りのなか
を飛行機が見ゆ

日のしたを地の上とほく黒々とひとい群れつ
ゝ流れて行くよ

東京の空をはるかに陽のかたへ黒點となりて
消え入りにけり

久保田柿人 目次

明治四十二年	(十首)	一
明治四十三年	(二十一首)	一七
明治四十四年	(四十九首)	一七
明治四十五年	(百五十一首)	三七
大正二年	(四十首)	九一

中村憲吉

明治四十一年	(十九首)	一〇七
明治四十二年	(十六首)	一一七
明治四十三年	(二十九首)	一二五
明治四十四年	(七十四首)	一三九
大正元年	(六十首)	一七三
大正二年	(百三十七首)	一九九

大正二年六月二十五日印刷
大正二年七月一日發行

(定價金八拾五錢)

歌 馬 鈴 奧
集 花 の 附

著者	久保田俊彦
著者	中村憲吉
發行者	西村寅次郎
印刷者	横田五十吉

東京市日本橋區橋物町九番地
東京市神田區松平町七番地

發行所

東京市日本橋區橋物町
電話本局一八七一番
振替東京五六一四番

東雲堂書店

東雲堂書店出版書

歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	歌集	英詩集	詩集	詩集
桐の	水莊	別藝	死か	黄昏	收木	啄木	早鈴	馬鈴薯	かろさね	The Pilgrimage	思ひ	邪宗
花記	離か	にか	に	穂	集	春	花	み	門	出		
北原白秋	吉井勇	若山牧水	若山牧水	土岐哀果	前田夕暮	石川啄木	岡田里	柿の村人、憲吉	岡本かの	野口米次郎	北原白秋	北原白秋
定價金 壹圓	定價金 壹圓	定價金 七十錢	定價金 七十錢	定價金 五十錢	定價金 七十錢	定價金 八十錢	定價金 七十錢	定價金 八十五錢	定價金 二十五錢	定價金 壹圓	定價金 九十錢	定價金 八十五錢

アララギ叢書近刊豫告

第五編	堀内卓造遺稿	(短歌百、長詩五、感想十五、小説三、脚本三)
第四編	ゆづり葉	(歌集) 伊藤左千夫著
第三編	赤光	(歌集) 齋藤茂吉著
第二編	屋上の土	(歌集) 古泉千楹著

東雲堂書店出版書

隨筆	隨筆	隨筆	評傳	論集	戲曲集	戲曲集	小說集	詩集	詩集	詩集	詩集	詩集
歐洲美術	啄木遺稿	局ある窓にて	哲人カアペンタール	演劇新聲	和泉屋染物店	午泉後三時	青鞥の小説集	夜路の傍の花	霧の獵人	白き手の獵人	東京景物詩	東雲堂
石井柏亭	石川啄木	平塚明子	石川三四郎	小山内薫	木下左太郎	吉井勇	青鞥社編	森川葵村	川路柳虹	河井醉茗	三木露風	北原白秋
定價金 二圓	定價金 九十錢	定價金 九十錢	定價金 八十錢	定價金 八十錢	定價金 壹圓	定價金 壹圓	定價金 八十錢	定價金 六十錢	定價金 五十錢	定價金 五十五錢	定價金 壹圓	定價金 壹圓

